

第5回横幹連合総合シンポジウム

「日本発：モノ・コト・文化の新結合」

学習院大学 遠藤 薫

Gakushuin University Kaoru, ENDO

1 横幹連合総合シンポジウム

2014年11月29～30日、東京大学で、第5回横幹連合総合シンポジウムが開催された。

横幹連合（特定非営利活動法人「横断型基幹科学技術研究団体連合」）とは、およそ40の工学系学会から構成される学会連合で、既に10年以上の歴史を持つ。社会情報学会も、文理融合の理念から、設立当初より横幹連合に参加している。また、本稿の筆者である遠藤は、2013年から横幹連合副会長を務めており、強い連携を結んでいる。

横幹連合では、隔年で総合シンポジウムを開催している。2014年のテーマは、まさに文理融合の可能性を追求する「日本発：モノ・コト・文化の新結合」であった。遠藤は、このなかで、「人間社会（1）～データから社会をあぶり出す」、「人間社会（2）～「カワイイ」文化は新技術・新産業を創出するか」の2つのセッションをオーガナイズし、社会情報学会のみならずにもご登壇いただいた。

これらセッションについて、簡単にご報告させていただきますこととする。

2 人間社会（1）～データから社会をあぶり出す

このセッションは、「近年、「ビッグデータ」など、あらためてデータ分析に関心が集まっている。社会科学の立場から、データを用いて社会を分析するとはいかなる営みなのかを改めて考える。具

体的な事例から、その可能性と限界、問題点などを議論する」ことを目的として企画された。

登壇者とその報告タイトル、報告概要は以下の通りである。（*を付した登壇者は、社会情報学会会員、[概要]は、各報告者の予稿から編集させていただいた）。

■オーガナイザー：*遠藤薫（学習院大学）

■「シティプロモーションの構造的な理解～「地域参画総量」の視点から～」：*河井孝仁（東海大学）
[概要] 少子高齢化や人口の都市集中が進むなか、各自自治体はシティセールス、シティプロモーション担当部署を立ち上げている。本報告は、地域の多様なアクターが地域経営に参画意識を持つことの重要性を示し、その実現のために必要な地域魅力創造サイクルを提案した。

■「オープンデータ政策の構造分析によるオークション制度の提案」：*佐藤哲也（デザインルール）
[概要] データ重視社会の極めて重要なソフト・インフラ施策であるオープンデータ関連事業について、本報告では、政策過程的な観点とビジネス事業者の観点から、オープンデータ事業の状況を検討し、今後の活性化に求められる方策について提案したい。

■「データジャーナリズムの可能性と課題」：*藤代裕之（法政大学）

[概要] データジャーナリズムは報道機関の新たな協業や枠組みを促す可能性がある。その一方、データの保持は権力を生む。今後、報道機関が公的データにアクセスし、検証できる社会的なコンセンサスや制度化についても議論を

行なう必要がある。

■「ビッグデータ・ガバナンス」：*吉田寛（静岡大学）

[概要] 2011年頃より、わが国でもにわかにビッグデータの活用が注目されるようになった。しかし、社会的・批判的研究は遅れている。本報告では、データを表象と見なす理論的観点に基づいて、ビッグデータ・テクノロジーの文工融合的なガバナンスの道を検討する。

ビッグ・データの社会的利用に関して、社会科学の立場から新たな議論を展開し、有意義なセッションとなった。

3 人間社会(2)～「カワイイ」文化は新技術・新産業を創出するか

このセッションは、「近年、「クール・ジャパン」戦略など、日本のポップカルチャーを新たな輸出産業として支援しようとする動きが注目を集めている。確かに日本のポップカルチャーが欧米、アジアなど広いグローバル世界に受け入れられていることは事実である。しかし、日本のポップカルチャーは、草の根的に自生してきたものであり、職人芸的な性格も強い。これを産業化することの可能性と問題を、分野横断的に、かつ、客観的に議論し、建設的な提案の場としたい」という趣旨で企画された。

登壇者とその報告タイトル、報告概要は以下の通りである。（*を付した登壇者は、社会情報学会会員、[概要]は、各報告者の予稿から編集させていただいた）。

■オーガナイザー：*遠藤薫（学習院大学）

■「日常性の再構築のメディアとしての日本型コンテンツ～その歴史的意義と世界への拡散～」:

*出口弘（東京工業大学）

[概要] 本稿では「日常性」を相対化しつつ様々な形で再構成する日本のコンテンツの作品群を、広義の日常系として捉え、その特色が江戸

期或はそれ以前にまで遡ることを見、今後の展望を提示した。

■「「未熟さ」の系譜～枠組みの提示と応用～」:

周東美材（東京大学）

[概要] 近代日本の音楽文化や「カワイイ文化」の歴史的形成を事例を通じて考察し、近代日本社会が、「未熟さ」という価値意識に特別な意味を与えながら、新しいナショナルな音楽を生み出していったという仮説を提示する。

■「感性価値としての「かわいい」の可能性」:

大倉典子（芝浦工業大学）

[概要] 人工物の感性価値としての「かわいい」について、その文化的背景、著者らのこれまでの研究結果を紹介し、その可能性にも言及した。この感性価値の可能性が今後大きく広がる端緒となることを期待している。

■「「可愛い」の思想～グローバル化／ローカル化の再帰的相互創出と「カワイイ」文化～」:

*遠藤薫（学習院大学）

[概要] 日本発「カワイイ」文化に注目が集まっている。いま、「カワイイ」の何が人びとをそれほど引きつけているのか。日本における「カワイイ」の系譜と、グローバリゼーションの時代における意義について考察する。

「カワイイ」という感覚的価値を文理の多面的なアプローチによって解き明かそうとする本セッションの試みは、大きな反響を呼び、現在、他の研究者も加えて、書籍化が進行している。

今後も、このような広がりをもった活動を拡げていきたい。多くの会員の協力を望んでいる。

2015年12月5～6日には、名古屋工業大学で第5回横幹コンファレンスが開催される。みなさまのご参加をお待ちしています。

参考文献

横幹連合第5回総合シンポジウム実行委員会（2014）『横幹連合第5回総合シンポジウム』予稿集